

幕末明治の写真師列伝 第四十九回 内田九一 その十四

ここ横浜では上客である外国人の居留地も近くにあり立地条件の非常にいい場所ではあったのだが、すでに同業者である写真師たちが数多く開業していた。そこで横浜馬車道の写真館をそのまま支店として、内田九一は明治2年、浅草旅籠町(浅草瓦町)にも写真館を開業する。さらにこの浅草の写真館の方を本店兼住居として、「九一堂萬壽」と称し、ここを東京での本拠地として活発に写真撮影の活動を始めている。この「九一堂萬壽」の写真館は『東京商工博覧絵第二編』(深満池源次郎編、明治18年)にて紹介されている。『アサヒカメラ』(昭和4年3月号)の石黒敬七(注1)「巴里に於ける日本の古寫眞 九一堂萬壽と美人寫眞」によれば、この「九一堂萬壽」の名称は、写真を撮ると一般に寿命が縮むという世論、迷信に対して、「萬壽」と号したという。ちなみにこの迷信の根拠は、石井研堂『明治事物起源6』(筑摩書房、1997年)の「(二四) 写真は寿命を縮むの迷信」によれば、中国の画人・朱漸の写生画の話しから出ている。

『アサヒカメラ』(昭和12年3月号)松尾樹明「日本写真大年表 明治編」の、西紀1869年、明治2年己巳の項には、「内田九一、廣澤三位を撮影。この年、浅草瓦町に内田寫眞館支店を、横浜に同横浜支店を開く。」「内田九一、上野大佛堂、上野中堂跡を寫す。瓦町の外に浅草茅町にも支店を開き中外の顯官貴紳の撮影を覓むる者多しと傳ふ。又是歳奥山にて俳優寫眞を売初む。一枚一朱。」という記述がある。

また、『木戸孝允日記』に、木戸が内田九一の横浜馬車道の写真館に行ったことが記述されている。以下がそうである。

明治二年五月廿八日

「(前略) 二字前去て寫眞司九市の店に至り各相寫す爾後散歩し又七十七番マークスの店に至り (後略)」

明治二年十一月十一日

「(前略) 三字乗艦の期に至り範蔵將發共に告別て去る九市寫眞店に至り正二郎並に従隨のもの等と寫眞を試む (後略)」

明治四年五月廿七日

「同廿七日 晴八字頃大久保出立帰京せり同時外出ヲリワタ之處に至り齒根を療治せり其より外国店を散歩し正二郎欧州行の衣類等を外国人へ注文せり正二郎梅之進等を携へ九市の寫眞店に至る十一字過宿に帰る (後略)」

『熾仁親王日記』にも以下のような記述があり、

明治五年十月廿六日

「廿六日快晴(中略) 一内田九一江寫眞行向之事、」

明治六年一月十六日

「十六日晴天 一浅草内田江朝八字出邸、寫眞行向之事、一午前十一字發車、三田英國公使館江ワツトソン招行向之事、家族兩名寫眞到来之事、(後略)」

浅草茅町のあたりは享保3年の火災後、一度火除地な

っていて「浅草茅町代地」と呼ばれていたことがあった。そのため明治初年の頃でも「浅草大代地」と通称されていた。内田九一は「明治二年の初め、浅草旅籠町に居を移し」とあるが、この「浅草旅籠町」は元禄元年以前から存在し、一丁目代地と二丁目代地に分かれていた。また、浅草瓦町二十五番地と隣り合わせの町である。従ってこの「浅草旅籠町」は、浅草瓦町二十五番地の自宅兼仮写場のことであろう。浅草茅町は奥州街道の沿道の地として江戸時代から栄え、商店街が形成されていた。浅草瓦町二十五番地は現在の柳橋一丁目24-2の辺りで、奥州街道から右に少し入ったところになる。現在、この界限には人形問屋が並んでいる。また、このすぐ近くには柳橋の花柳界があり、明治になってこの花柳界に遊ぶ薩長出身の政府高官も多かったことから、写真館を開業する場所としては、絶好の場所だった。このあたりに内田九一の商才のよさが見て取れる。この「九一堂萬壽」は当時唯一の洋式建築の写場で、長崎以来の松本良順、勝海舟らの引き立てもあり、新政府の頭官貴紳はもちろんのこと、梨園、花街の多くの客が評判の内田九一の撮影を求めて、かなり繁盛していた。

このことは後年にはなるが、明治二十九年一月二十八日の『読売新聞』にて当時有名な写真師であった江崎礼二(注2)が、「わが国の写真の歴史などを語る」として、「内田九一長崎より来り松本順氏の周旋にて高貴へ取り入り大いに勢力ありし」と語っている。また、東京大学総合図書館所蔵の明治四年の引札(広告)で、「浅草仁王門内写真処引札」、「内田九一写真絵引札」も今日残されており、内田九一撮影の写真は複写されて手広く販売されていた。

注1：石黒敬七(1897～1974) 大正・昭和時代の柔道家、随筆家。

明治30年8月10日生まれ。新潟県出身。早稲田大学卒。大正4年講道館にはいり、大正13年から昭和8年までヨーロッパ、中近東で柔道の普及につとめる。昭和21年講道館八段。昭和24年からNHKのラジオ番組「とんち教室」に出演。古物の収集家としても知られた。昭和49年10月1日、享年77歳で死去。著作に『写された幕末』など。

注2：江崎礼二(1845～1909) 幕末・明治時代の写真家。

弘化2年3月3日生まれ。美濃出身。下岡蓮杖のち上野彦馬にも学ぶ。明治四年東京で写真館を開業。明治15年乾板を使用して隅田川での水雷の発火演習を撮影し、「早撮りの江崎」として知られる。天体写真や夜間撮影に成功した。明治42年6月7日、享年65歳で死去。

(森重和雄)